
機刀物語 オートマティック・ブレード

ばんちょう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機刀物語 オートマティック・ブレード

【Nコード】

N98400

【作者名】

ばんちょう

【あらすじ】

手にしたものは天下を統べるとされる機械仕掛けの日本刀、傀儡機刀を全て回収し、幕府に安寧を取り戻せ。その使命を果たすのは、高飛車毒舌娘こと螺子姫と、三懷刀と呼ばれる凄腕美剣士達。そして、機刀を巡る様々な人々の思いが交錯する…

第零刀：機械刀、傀儡機刀

それは、大坂夏の陣を豊臣勢力が制し、豊臣秀頼が征夷大將軍となつて大坂に幕府を開き、天下太平の世が訪れたもうひとつの時代。幕府の強大な権力は日本の隅々まで行き届き、それは決して揺らくことの無いものだと思ひもが信じていた。

將軍家の軍勢に敵う勢力など、最早日本には無いのである。関ヶ原で天下を取つたはずの徳川家をも飲み込んだその力は計り知れず、人も金も、他の者とは持っているものの次元が違うのだ、当然といえば当然、至極真つ当な意見である。

だが、そんな幕府にはひとつ、最も恐れるものがあつた。それは刀である。いつどこで誰が作り上げたかも分からない謎の刀だ。

「傀儡機刀」。くぐつきとう、と呼ぶその刀は、およそ日本刀らしい形はしていない。いくつも種類があるのだが、大抵は畳一枚分はあろうかという巨大な刀身で、重さは大の大人一人分という、人が手に持つて振り回すものとして作つたのなら、これは別の遠い星の住民が作つたと思えない規格外の刀だ。

その内部には無数の歯車が納まつており、中心には三日三晩かけてこしらえた呪術が施された、猪の心の臓が埋め込まれているという。傀儡機刀を分解したという者は誰一人確認されていないので、これは伝承の類である。

そしてこの傀儡機刀の最大の特徴が、持ち主の血をすすって動力にするということだ。血を浴びた機刀は水を得た魚のように歯車の軋む音を鳴らし、一国の侍を一振りで蹴散らすと比喻される絶大な

力を振るう。

原理も構造も誰も知らない刀は、こうして奇々怪々な能力によって妖刀として恐れられながらも、時の権力者はこぞってこの刀を収集した。ある者は刀に魅入られて主を裏切り、寝込みを襲って寺を焼き払った。またある者はその刀を自力で作り上げようと、刀狩令を発して民から材料を搾取した。

しかし、奪い奪われの果てに、傀儡機刀は忽然と歴史の表舞台から姿を消した。それは関ヶ原の合戦が行われ、徳川陣営が勝利を収めたのとはほぼ同期であった。それはまるで、これより訪れる太平の世界に、自分達の居場所が無いことを悟ったかのようなであった。一説では、大坂夏の陣を豊臣家が制したのは、密かに傀儡機刀を集めせしめたからとも囁かれた。

そして月日は流れ、傀儡機刀の伝説を知る者はほとんどいなくなっていた。歴史の風化はいつも何の前触れも無く、淡々と起きるのだ。あえて知る必要もないし、知ろうにも知る手段も限られていた傀儡機刀の逸話など、この戦いからすっかり縁遠くなった日本には蛇足なのだ。

しかし、どんなに血生臭い空気が浄化された世になろうと、傀儡機刀は滅びたわけではない。

機刀は生きた刀。血に飢え、血を求め、その為に所有者から血をすすする。

その為に機刀は力を振るう。所有者を魅了させ、もっと己を振るえと、言葉無くても語りかける。

そして所有者は声無き言葉に言われるままに、己の血を機刀に注ぐ。

即ち所有者は機刀の操り人形、つまり傀儡、故に傀儡機刀。

刀の形をした吸血鬼は我慢の限界であった。待てど暮らせど昔のような死臭立ち込める戦場に立ち会うことは無くなった。そんな傀儡機刀が取るべき行動は、ただひとつであった…

第壱刀：機刀零式、血炎槍 その一

將軍家のお膝元、城下町たる大坂市街の一角にある、とある高級料亭。手入れが行き届き、木々の一本一本が耽美で池の鯉一匹一匹が優雅な中庭を臨むその八畳ほどの一室に、その落ち着いた空気にはそぐわぬ雰囲気の一組の男女がいた。

男は歳こそ若そうだが、庶民が羽織るような、袖の短い麻の着物を着た少々小汚い痩せこけた姿をしていた。見るからに不健康そうである。

一方の女は、歳にして十ほどの幼子であつたが、目つきは狐のように鋭く、金色の長い髪を団子状にまとめ、長いかんざしと派手な着物を身に纏つた、かぶき者のような格好をしていた。見るからに変わり者である。

「ご足労ツス螺子姫ちゃん。わざわざ近江からこの城下にまで参上頂けるとは、螺子姫ちゃんも意外と優しいんスね」

「か、ん、ち、が、い、するな、鳶よ。あたしは御上の命に従つて、溝鼠も顔負けの肥溜め臭い仲介役の貴様の頼みを、溢れんばかりの涙を呑んで聞いてやつていただけだつっの」

肘掛にもたれ掛かり立膝をついて、およそ姫らしからぬ姿勢で開口するやいきなり罵倒の嵐をぶち当てた螺子姫。彼女はこの成りだが、幕府直轄で困難な任務を請け負っている仕事屋であるのだ。表立っては行えない事、幕府の手回しとは知られたくない事を代わりに行つ、身代わりのような存在なのであつた。

そんな彼女に、鳶は罵倒が聞こえているのか疑わしいほど真顔で答えた。

「螺子姫ちゃんが相変わらずおれっちへの風当たりが強いのが確認できて良かった良かった、元気そうで何よりだよ」

「うるさい、それよりも任務とは何だ？ こっちは旅路の疲れも癒えぬままここに足を運んでいるのだ、長話なら日を改めて頂戴」

「へいへい、そんなじゃお話しますかね」

鳶は少しため息混じりに言うと、もぞもぞと姿勢を正した。そして、ほんやりと天井を見上げながら話を続けた。

「んま、螺子姫ちゃんにはちと物足りない、ってかやりがいのない仕事かも知れないけど、とある男の身辺調査をやってほしいんだよね」

「身辺調査？」

「そうそう。ここ大坂と京の境に、水口山っていう殺風景な山があるのは知ってるか？ そこに住んでいる『野孤斬 靖枝』という男の身辺を洗ってもらいたいとき。何でも、幕府を揺るがすところもないものを隠し持っているとか」

「また漠然としているじゃない。こっちの主観で探りを入れると？」

「詳細は分からないんだよ、機密文書なのか、徳川の埋蔵金の地図なのか、はたまた武器か…情報元もいい加減でな、とにかく足を

運んでみるしか正体は分かりそうにない。嘘の情報かも知れないが、今の幕府は臆病なんだ、この仕事は保険というやつだ」

「目的が曖昧だとやる気が五割減だ：しかし、のこぎり やすえ、ねえ：いかにも林業で稼いでます宣言してるような名前だなあ」

鳶の話した仕事の内容が本当に拍子抜けなのか、螺子姫はうなじの辺りをポリポリ掻きながら言った。その眉をひそめた不愉快そうな表情は、そんな明らかな凡人相手に幕府子飼いの人間を差し向けるのは、自分達をおちよくっているのか欺いているかのどっちなんだとでも問い詰めたそうであった。

すると鳶は、またへらへらとした表情で答えた。

「螺子姫ちゃんは御上の命で動く人間。その御上の言いつけに、『えゝ何それ邪魔くせゝ』みたいな事思っちゃいないよね？」

「勿論任務は果たす。当たり前だろ。しかしそれくらいむしろ貴様がやれば済むんじゃないの？ 曲がりなりにも貴様も忍びだろう？」

「ははは、おれっちも忍びの心得はあるさ。でも今はただの連絡係よ。それに、『迅刀のお釘』を抱える螺子姫ちゃんが他の忍びを頼るなんて、何とまあ滑稽なことっ」

下品な笑みを浮かべる鳶。すると、螺子姫の背後のふすまの向こうから、厳つい声色の女子の声が聞こえてきたのだ。

「全くだ。よく分かってるじゃない、鳶。忍びの技量であんたが私に敵わないってのがさ」

その声が聞こえた瞬間、鳶は先ほどまでの碎けた雰囲気から一変して気まずそうな表情を浮かべた。そして螺子姫は、対照的にどこか誇らしげに鼻息をひとつ吐き出してみせた。不満さゆえにむんずと閉ざしていた彼女の口も、僅かに綻んだのだ。

次の瞬間ふすまが勢いよく開き、そこには一人の忍び装束の女が立っていた。黒髪の短髪に橙色の籠手と足具を備え、豊満なお乳に黒い足布で絶対領域も完備、そして腰には艶やかな光を放つ忍小太刀を差していた。

「お釘：お前え、いつからいてたんだよ。確かこの辺の蕎麦屋で他の二人と飯食ってんじやなかったのかよ」

「私は姫様の懐刀だよ、呑気に座談でもしてると思ったの？ 鳶はそんなんだから使いつぱしりの下忍から昇進しないんだよ」

その忍び、迅刀のお釘は鳶を見るや、さらりと鼻で笑ってやりながら言った。その刺々しい言葉は、偉そうに言いたい事ばかり喋っていた鳶への仕返しのようなようであった。

「全く、三懐刀が出てくるとやり辛いつたらねえな：螺子姫ちゃん天狗っぷりを馬鹿にするのは面白いんだが、お前ら相手に言葉の暴力振るうと何が飛び出すか分かったもんじやないしょあゝ…」

「姫様を馬鹿にすれば今想像してる三倍はひどい仕打ちに遭うわよ？ んま、私達とあんたの貶し合いは免疫ついちゃったけどさ」

お釘はすっかり調子の狂った鳶に向かってそう言った。彼女の台詞からは、鳶を子犬の如く手懐けられるという余裕が伺えた。

お釘の存在こそ、螺子姫が幕府に重用される所以である。彼女は「螺子姫三懷刀」と呼ばれる螺子姫に従う家来の一人であり、「この世で最も鋭く速い剣技を持つ者」と称される。彼女一人で小国の大名の戦力に匹敵するとまで言わしめるほどのだ。

神速の剣捌きと多彩な忍術を駆使し、幕府が抱える忍びとしては彼女を越える実力者はいないとされるのだ、同じ忍者として同じ場にいるだけで劣等感に苛まれるのは致し方の無いことであった。

「話は聞いてたっばいなあ。んじゃあお釘、きっちり職務は全うしてくれるんだよね？」

「当然。忍びは命令が無くちゃ動けない、言わば傀儡だしね。」

閑話休題、鳶がお釘にそう尋ねると、彼女も心なしか邪魔臭そうな雰囲気臭を臭わせながら言った。

「つーわけで宜しく頼むわ。まあ今回は三懷刀が派手に暴れる機会は無いと思うけど、報告書だけはちゃんと書いてよね」

「はいはい、こちらら暴れる元気も無いほどくたびれてるから心配しなくていいよ、お釘にはのんびりやってもらうさ」

鳶の去り際の言葉にも、気だるそうに答えた螺子姫。そして鳶はゆっくりと立ち上がると、お釘の脇をすり抜けて外へと立ち去っていった。

お釘がそつと外を確認して鳶がいなくなったことを確認すると、螺子姫の視線までしゃがみ込んで言った。

「それにしても、偵察任務に我々を使うなんて、幕府は人手不足なんではないかね？」

「ま、幕府には人はたくさんいるが、こういう仕事は忍びの専売特許じゃないの？ 鳶もあの様じゃきつとへマをやらかしそうだし、一番手堅くお釘をけしかけたいんでしょ。ほら、ちゃっちゃんと終わらせるよ」

「ですね」

螺子姫は懷から扇子を取り出してしきりに開閉させながら、背後にいるお釘に首だけ向けて言った。その腑抜けた表情は、この程度の任務など、彼女らの中ではお使いの類にすら入れ難しと語っていた。

そして二人はすつくと立ち上がると、料亭の小部屋から出て行った。しかしこの時、幕府が誇る三懷刀にこの役目が任された本当の意味を、彼女達はまだ知らない。多少なりとも感付いていようと、水口山に暮らすただの民に隠された秘密など、想像しうる範疇の遙か上であつたのだから。

機刀零式、血炎槍 その二

大坂。それは天下の台所。あらゆる物流が集まるこの地には、日本にあるものなら全てある。米、野菜、魚、肉、布、陶器、紙、木材、鉄、金、そして人。豊臣幕府の直轄地でもある大坂はその全てが幕府のものといっても過言ではない。中央にそびえる難攻不落の城、大坂城の壮大な佇まいは、欲する物を全て手にした偉大さを日本中に誇っているかのようであった。

唯一つ誰も見た事が無いものといえば、伝説の刀、傀儡機刀くらいだろうか。しかしこれだけのものを手に入れた幕府には今更必要の無いものではあるが。

幕府の使者、鳶から他愛も無い仕事を請け負った螺子姫とその懐刀のお釘は、活気溢れるこの町の中心部を歩いていた。花魁にも負けない姫のど派手な着物と、お釘の忍び装束が並んでいても違和感という概念すら塗り潰してしまうほど、人々は活気付いていた。派手すぎて目立たないという矛盾は、ここでは日常のようだった。

「お釘…疲れた」

「いやいや…まだ料亭を出て二百歩と歩いてませんよ？」

螺子姫はぶつくさと文句を言いながら、足をだらしなくぶらつかせた、はしたない歩き方をしながらお釘に言った。

疲れた、と言っているがそれも当然である。螺子姫が履いているのは、自分の手の指先から手首までの長さよりまだ長い、一本歯の朱色の下駄なのだから。傍から見ればいつ転ぶかが気が気でない

い履物である。

「そろそろ普通の下駄に変えてはどうです？ そんなに背が低いことに劣等感を抱いておいでで？」

「ちつ、違う！！ 違うもん！！ これは年頃の女子としての嗜みだ、身長を気にしてるからではないわ！！」

お釘は何気なく語ったつもりだろうが、螺子姫は急に顔を赤く染めると、口をすっぱくして言い返した。余程突っ込まれなくなかったのか、口調からして我を忘れている様子であった。

「違うもんって…意地張らなくて結構ですよ。私は姫様の右腕なんですから、全てを曝け出して頂いても…いててっ！！」

「全く、お釘は自分も他人も重々承知であっても、あえてそれを体裁だけでも秘密にしておきたいという感覚が分からのかぁ…ん？」

すると螺子姫は彼女の頬を掴むと、飼い犬の手綱を手繰り寄せるかのように思い切りつねった。引っ張られたお釘の顔の表面積が三割り増しになりそうなくらい強烈に引っ張った。

「ひ、ひたいでふふへさま…、ほふひはえはひあへん…（い、痛いです姫様…、申し訳ありません…）」

「まったく、お前は妙にあたしに反抗的なのが好かん。やはり、納斗の背中におぶられるのが一番落ち着くわ」

螺子姫はそう呟くとお釘から手を離れた。彼女の頬は痛々しい朱

色に染まっていた。お釘はその頬を涙目で擦りながら言った。

「どれだけ思いきりつねるんですか…しかし、納斗達はどこに行っただけでしょうねえ、私だけ心配して飛び出してしまったんですけど…」

その時、彼女らを呼び止める声が聞こえた。

「やっと見つけましたよ姫様、それにお釘…どうやら入れ違いのようでしたね」

二人が振り返ると、そこには男にも引けをとらないほどに長身の女性が立っていた。前髪を切り揃えた艶やかな黒い長髪で、装いは胸元のはだけた桃色の着物に黒の袴、それに西洋の黒の編み上げ靴を履いた姿。二本の刀を腰に差した立ち姿に刀の切っ先のように凛々しい面は、美男子と形容するのが相応しかった。

彼女が、螺子姫三懷刀が一人、「剛刀の納斗」である。「この世で最も重く力強い剣技を持つ者」と評される。女子ばかりの螺子姫一行でありながら、彼女一人の腕力だけでも大の男数十人分は軽く賄えるとされる、読んで字の如く豪腕の持ち主だ。

「納斗、とりあえず疲れた、はいっ」

納斗を見るなり、螺子姫は心なしか晴れやかな表情を浮かべると、多くを語らず右手を差し出した。すると納斗は、顔色一つ変えず、何も言わずにその手を取った。

「かしこまりました姫様…ご自身の足を酷使させてしまった事、謝罪いたしまする」

納斗はそう言って、螺子姫をまるで布切れでも肩に掛けるかのよう
に背負ってみせた。まだまだ子供とは言え、その一連の動作はま
るで螺子姫に重さを感じさせない。剛刀と語られる彼女の腕力だか
らこそ成せる技だ。

「しかし、もうお話がお済みとは…今回の任務は、別段刃を振る
うまでの仕事ではないとお見受けしますが…」

「察しがいいね納斗。ああ、今回はお釘一人で十分、いや、二十
分以上つてところだ。この様子なら三ヶ月振りの大坂の町を納斗の
上でゆっくり散策できるというものだな」

納斗の堅苦しい問いかけに、その彼女の頭にしがみついていた螺
子姫は、気の抜けた声色をして首をポキポキ鳴らしながら言った。
そのくつろぎっぷりは、およそ自分の部屋で一人で勝手にやってほ
しい図々しさであつた。

しかし、さらりと面倒事を押し付けた螺子姫に対し、納斗の表情
は一切変わらない。免疫なのか体質なのか、これ以外の表情をする
能力を持っていないかのように。

「これより暫しの間は、我の背中から降りる事は無さそうですね
…一向に構いませんが」

「あまり姫様を甘やかすのは良くないと思うけどね納斗。従者と
して」

「主の命に忠実なのが罪とはいかがなものかと思えますけれどね
お釘。従者として」

水を差すように言ったお釘に、納斗はまた無表情にさらりと言いつ返した。

「私は忍びだけれど、姫様の教育係みたいなもんじゃない。まあそんな事より、くさびはどこ？」

「くさび？ ああそうですそうです、ちょっと食事を取った料理屋で面倒なことに…」

そう言ってようやく人間らしく困った表情を浮かべた納斗は、ちらりと後ろを振り返った。螺子姫とお釘がその視線の先を追うと、料理屋の店主らしき板前の男と、一人の女性が激しく口論をしていた。

女性は栗色の髪の毛を二つに分けて束ねており、花柄の着物の上からもう一枚厚手の着物を肩から羽織り、背中には三味線を背負っていた。歳は十五、六ほどだが、その円らな瞳と垢抜けていない顔は、歳より子供っぽいというより幼稚っぽく見せていた。

「お兄さん、はなしがちがうじゃないですかあゝ！！ お金ははらいましたよ?!」

「何度も言っただけど、おじょーちゃんのお食事代はそれじゃちつとも足りないんだよ。そのお金は最初の蕎麦の分だけだ。さ、とつとと代金を払いな」

「ひどいですうゝ！！ いんちきです、さぎです、ぼつりゃくですっ！！ みなさーん、このみせはおきやくをだましてお金をまき上げるとんでもないお店ですよゝ！！」

「こらっ、でかい声で嘘八百言いふらすんじゃないねえ！！　　ったく…最初に一品頼んだら後は食べ放題だとも思ってたのかあ？」

三人の目に飛び込んできたのは、明らかに知能指数が人並みに達していないであろう、口振りの残念な娘の駄々に、延々付き合われうんざりしている男性の姿だった。詳しい事情は知らないが、どうやら彼女は料理の値段を気にするよりも空腹を満たす事を優先させてしまったようだ。

「だってお品書きのあんな小さい文字、おながが空いてたらよみとばしちゃうじゃないですか！！」

「読み飛ばさねーよ！！　　って言うか、お連れさんを除いてもあれだけたくさん食べておいて五分（おそよ五百円程度）置いてご馳走様って、駄菓子屋さんじゃねーんだぞ！！」

「そ、そうなんですか？　　いや、いつもお釘ちゃんや納斗さんにおかんじょうしてもらってるから、おりよりのねだんなんかぜんぜん分からなくて…だから何ともふしぎに思わなくて…」

周囲の人々も何の騒ぎかと集まり始めていた。善悪の決着など口論になる前から決している喧嘩を、不思議そうに見つめていたのだ。そんな光景に、螺子姫は何とも恥ずかしそうに目を背け、お釘は呆れ気味にため息を吐き、納斗はとりあえずその場に突っ立っていた。

しかし、このようやく自分が阿呆の出血大売出し中に気付いて辱めを受けている彼女こそが、螺子姫三懷刀が一人、「美刀のくさび」であるのだ。彼女は「この世で最も美しく巧みな剣技を持つ者」とされ、その剣捌きは精巧にして正確、宙を飛ぶ蠅の羽一本だけを切

り落とすことができるとも言われ、そしてその様は舞踊のごとく可憐で華麗だと噂される剣士であるのだ。

しかしそれ以外は、三味線を奏でられる事を除いて、てんで冴えない駄目娘であつた。

するとお釘は、怒りと呆れが五分五分に同居した齒痒そうな面をした男の掌に、そつと五匁（およそ五千元）を置いて申し訳なさそうに言つた。

「ほら親父、代金だ。受け取ってくれ。私の連れが迷惑を掛けて申し訳ない」

「んあ？ おお、毎度あり！！ いやあ、きちんと金さえ払つてくれりや何も文句は無いつてのよ。おおきに」

お釘の平謝りに対して、代金を受け取つた男はけろつと態度を一転させ、満足そうに自分の店に帰つていった。その浮かれようはまるでお小遣いをもらつて喜ぶ少年である。

「くさび、ちよつと集合」

「はい、なんですかお釘ちゃん…？」

男が去つたのを確認したお釘は、目線を向けずにくさびを手招きした。キョトンとした表情で近寄ってくる彼女の後頭部に、その直後お釘の強烈な張り手が叩き込まれた。

「あいたあつー！！」

「往來の人の目の前で、小っ恥ずかしい場面を見せないでよね！
！！ 食い逃げ紛いの真似して堂々店員さんに喧嘩売るとか、どう
いう神経してんの？！」

「ふええん…ご、ごめんなさい…でも、そ、そんな思いきりぶた
なくても…目がこぼれおちそうになりましたよ…」

怒り心頭のお釘の、人の脳天への突っ込みとは思えない、軽く頭
蓋骨を割りそうな痛烈な一撃に、くさびは頭を抱えてしゃがみ込み、
大きな瞳からぼろぼろと涙を零しながら言った。

しかしくさびの世間知らずという単語で収まりきるのか怪しい無
知つぷりを晒しても、螺子姫と納斗の反応はそれほど過敏でもな
かった。むしろお釘が正しく反応しているところか。やはりそれも彼
女らの中では日常の光景の一端に過ぎないようだ。

何はともあれ、螺子姫が誇る剣士、三懷刀の面々はこうして集合
したのであった。

勝気で活発なくのいち、迅刀のお釘。

冷徹な生粋の女武者、剛刀の納斗。

一行のポケ担当の楽士、美刀のくさび。

しかし今回請け負った仕事を行うのはお釘一人だけ、三懷刀の刃
が煌く機会は無さそうである。この時は四人の誰しもがそう思っ
ていた。

機刀零式、血炎槍 その三

水口山は、国境に位置する険しくも寂れた峠の中で最も高い山である。前は良質のヒノキが育っていたこともあり、日本一の城、大坂城建造の為の材木が切り出された山であった。しかし、戦を重ねて傷付いた城を修復する為に更に材木が伐採され、いつの間にか裸の山にされてしまったのだ。

周辺の住民もより豊かな暮らしを求めて城下町へと赴き、誰も手入れされぬまま野晒しにされた水口山は、緑とも茶色とも言えぬ奇怪な色をした山肌を露出させ、人々に人間の業の深さを知らしめているかのようであった。

螺子姫三懐刀に名を連ねる迅刀のお釘は、その水口山のごつごつとした岩だらけの道なき道を一人歩いていた。城下で仕事を請け負った後、螺子姫や納斗、くさび達を城下町に残し、単独でこの地へと赴いたのだ。

「関所要らずの水口山、か…確かに、こんな足場のひどい山道を歩いて国を越えるくらいなら、関所で役人とやり合った方が幾分か気が楽そうだ…」

お釘だけを見れば少々傾斜の急な山道を登っているように見えるが、実際はというと足場は岩ばかりでありながらも風化がひどく非常に脆い、一歩進むだけでもただ足を置くだけではいつ崩れるかも知らないような道であった。軽装で、しかも忍びであるお釘でもなければ、間違いなく足を取られて岩肌に頭を打ち付けてしまっただろう。

「晴れている間にヤツの家に着きたいところだねえ……ん？」

こうして全く楽しみも高揚感も無い登山に勤しんでいたお釘だったが、麓の町が胡麻粒ほどに小さくなる位まで上ったところで、傾斜が無くなり、開けた景色が彼女の目の前に広がってきた。

殺風景で寂れた荒涼な光景であるのに変わりはないが、まるで巨石が降り積もってきた山のごくごつごつとした今までの登山道とはうって変わって、小さな荒野のような一帯へ辿り着いたのだ。

そこには、せいぜい見かけても朽ちた木々しかなかった水口山には不釣合いな、立派で瑞々しいヒノキを組み上げて立てられた一軒の小屋があり、その前にある小屋とほぼ同じ位の広さの畑で、大根を収穫する青年の姿があつた。

彼女は人の姿を察してすぐさま軽く地面を蹴った。するとその身は煙のように音も前兆もなく消え、次の瞬間には三十歩は必要な遠さにある手頃な岩陰に潜り込んだのだ。これが彼女の迅刀たる所以でもあつた。そして、神妙な面持ちで顔を覗かせた。

「あれが、野孤斬 靖枝……なんか、良くも悪くも、予想以上に、普通だ……」

しかし、お釘は岩陰に身を潜めながら、その男をどこか残念そうな目をして見つめながら呟いた。

土塗れになりながら大根を土から引っこ抜いている彼は、確かに野孤斬 靖枝である。歳は二十過ぎといったところで、顔の輪郭はまだ若々しい。毬栗のようなつんつんの黒髪に、身の丈より一回り大きい目の黒色の麻の着物を、帯から上は筋骨隆々の右半身を露出さ

せて着こなすその格好がなかなか様になっているだけに、懸命に農作業に従事する姿がお釘には違和感を覚えずにいらなかったようだ。

「うほっ、大物きだぜこれ！！　今までで一番じゃないか…っておい！！　虫食ってるじゃねーか！！　ちくしょー、俺が大事に育てた大根から出てけこのっ！！」

一人で虫に巣くわれた大根相手に大きな声で独り言を語り続ける靖枝は、人形と戯れている少女の面影を醸し出していた。お釘にしてみれば、気味が悪いだけかもしれないが。

「あの男に、どれほどの秘密があるつてのよ…？」

すると、靖枝は収穫したての野菜を畑横の井戸水でさつと洗い土を落とすと、荷車に次々と載せていった。荷車は本来牛に引かせる為のものようで、大人が十人は余裕で乗れるほどの大きさであったが、その上に山なりになるほどの野菜を積み込んだ。

「よいこらせつとお…」

靖枝は見ただけで重たそうな野菜が満載された荷車を持ち上げると、車輪が軋んで悲鳴を上げながら家に背を向け歩き出した。

「まさか、麓の村に野菜を売り込みに行くつもり？　いくら何でも欲張りすぎでしょうよ、あの山道をその荷車引っ張って降りるなんて、私でもできないってば…」

その様子を見ていたお釘は、彼の無茶っぷりに少し可哀相に思う目をしながら呟いた。忍びの者が登るだけでうなだれる山道を降る

とは、とても思えない姿であるからだ。しかし、靖枝は何食わぬ顔で荷車を引き続けていた。

そしてそろそろ山の傾斜がきつくなってきたところで、靖枝はいきなり野菜の載った荷台に飛び乗ったのだ。直後に荷車は斜面にさしかかり、ひとりでに山道を降り始めた。荷車はやたらと頑丈なように、その重量と相まって山肌を剃刀で削るかのように地形をもろともせず走り続けた。文字通り爆走である。

しかし、急斜面である水口山ただけあって荷車が走る速度はすぐに馬の駆ける速さに達したが、靖枝は野菜の上でむしろこの状況を楽しんでいるようだった。

「ひゃほーーーーー！うっ！！」

「むっ、無茶苦茶だーーーー！」

お釘はこの予想斜め上の行動に出てあつという間に視界から消え去った靖枝に、素直な感想を突っ込みとして叫んでしまった。だが、冷静になって靖枝の家に目をやると、しんと静まり返っているのだ。他に同居する人間はいないようであった。

「探りを入れる相手は馬鹿な農民、しかも一人暮らしでこれからしばらく帰る様子は無い、か。ちよつと都合が良すぎて逆に嵌められた気分だわ」

時間が過ぎるにつれて任務遂行の難度が下がる中、お釘は堂々と玄関から靖枝の家の中に潜入した。潜入というより、お邪魔した。

家の中はかなり質素であった。外観こそ立派だが、必要最低限の

家財道具以外は何も置いていなかったのだ。あれだけ一人でも明るく振舞えるのに、ここでは食事と睡眠以外にできる事が、あまりにも少なそうだった。

「さて、何をどう探ろうか…家の中もさほど広くないし、やましい物を隠す場所も大して無さそうだし、いきなりどん詰まりって感じ…」

頭をポリポリ掻きながら、お釘はそう漏らした。家の中にある物は数える程度だった。使い古した食器、男物の着物、畑のものであるう野菜、中身の少ない米びつ、出しっぱなしの布団、お釘の身の丈に迫る大きさの布がぐるぐる巻かれた図太い長方形の物体、土がびっちり付いた農具が、あちこちに散乱していた。

彼女はとりあえず部屋の奥にあるふすまを開けて、中を重点的に探した。床板や天井の板を外して見回るも、そこには蜘蛛の巣が張ってあるだけだった。畳も一枚一枚剥がしていったが、いたのは子ネズミの家族が一組だけだった。

「本当に何も怪しいものは隠されてないじゃない。まさかさっきのネズミが幕府の存亡に関わるものとか？ 城の柱を食い荒らして大坂城を倒壊させちゃう、的な？」

お釘が最早ネズミを疑わないといけない位に、靖枝の家にやましいものは存在しなかった。早々に手詰まった彼女は、どかっと畳の上に腰掛けた。

「冷静に考えれば、水口山をあんな単純な発想で駆け下るようなヤツが、ともに秘密を隠せるわけないか…じゃあ逆に、私の忍者の勘が働かないくらいバレバレだとか…？」

開き直った思想になったお釘は、もう一度改めて部屋を見回った。すると、堂々と彼女の手元においてあったのだ。お釘の身の丈に迫る大きさの布がぐるぐる巻かれた図太い長方形の物体が。

先程は「怪しい物とは人目に付かない所に隠されている」という彼女の固定概念のせいでも目にも留らなかったようだが、今一度それを見たお釘は、それに釘付けになっていた。生活必需品しか存在しない靖枝の家だが、このような巨大な形であり布に巻かれる必要のある生活必需品は、彼女の脳内には存在しなかった。

お釘はこの物体に巻きついた白い細布をはらはらと脱いでいった。物体は見た目そのままに彼女の体重に匹敵するほどに重く、巻かれた布の量ゆえに全容が見えてくるのに少しばかり手間を要したが、その姿を見た瞬間にお釘の表情は固まった。

「こ、これは…」

彼女が見たのは、一振りの日本刀であった。しかし、それを日本刀と呼ぶ根拠は通常より一回りほど大きい柄だけであって、それ以外はおよそ刀の姿はしていなかった。柄の先には赤い鍍金が施された分厚い鋼の箱が取り付けられ、その合間からは彼女の人差し指ほどの長さのある刃がぐるりと縦に連なって配置され、さながら巨大な鋸といった様相であった。

そして、その鋼の装甲の根元に、金色の小さい文字が刻まれていた。そこには、「傀儡機刀零式、チェンソー血炎槍」と記されていたのだった。

「まさか、これが…あの、傀儡機刀…？」

今までまるで締まりのない態度であつたお釘の表情が一瞬でこわばった。悪い夢でも見ているように瞳の中を不自然な軌道で泳ぐ視線は、目の前の現実を受け止めていない証拠だった。

忍びとして様々な戦史、歴史にも学のある彼女は傀儡機刀の逸話は十分に知っていた。それがどれだけ自然の理を超越した刀であるかも。

そしてお釘は震えていたのだ。一振りの刀を見ただけで。螺子姫三懷刀と語られる身になつても、彼女の中で傀儡機刀とは偶像とは思えないほどの力を有する存在であつたようだった。

直後であつた。ばたばたと忙しない足音がこちらに向かって迫ってきた。ここは水口山の山頂付近、そんな場所へやってくるのは、靖枝以外は考えられなかった。

「ちいっ！！ 何故もう帰ってくる？！ せめて、こ、これだけでも……」

お釘はとつさに、この予想斜め上の戦利品だけでも持ち帰ろうと柄に手をかけるも、血炎槍は畳の表面をかつら剥きするかのように抉り取つたのだ。いくら鍛え抜いた忍びとはいえ、血炎槍は重すぎた。

お釘は細腕だが腕っ節は並の男より遥かに強い。だからびくともしないわけではない、運ぶことはできる。でも迅刀のお釘も鈍らとなつてしまつては、靖枝から逃れるのは不可能だった。

「せめて納斗なら持ち出せるだろうけど、これが私の限界か……だが、この収穫は大きい。大きすぎる。まさか傀儡機刀が眠っている

とは、上様の驚かれる姿が目に見えわ……」

血炎槍から手を離れた彼女は、そう呟いてほくそえんだ。直後に、慌てた様子で靖枝が家の中に飛び込んできたのだが、既にお釘の姿は消えていた。靖枝と入れ違いに玄関から出て行ったのである。速すぎて、消えたように見えるのだ。もっとも彼女の存在を知らない靖枝には、消えたかどうか分からない速度であったが。

「やべえやべえ、今日は遠出だから握り飯を作っておいたのに、危うく置いて行くところだった……って、あれ？」

しかし流石にお釘が血炎槍をほったらかしで出て行ったので、忘れ物を取りに帰ってきた靖枝はすぐに異変に気付いた。鋭い目つきで、荒らされた部屋の様子を見つめ、事の次第を確認した靖枝は、ほどかれた血炎槍の巻き布を元に戻しながら呟いた。

「久しぶりに血炎槍を狙う輩が出てきたか……ほんと、誰も知らないんだなあ、この血炎槍が、俺にしか使えない代物だって事に……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9840o/>

機刀物語 オートマティック・ブレード

2010年11月24日20時27分発行